

## 漢方医学の普遍性をいかに担保するか

How to Accomplish the Universality of Japanese-Oriental (Kampo) Medicine

寺澤捷年

千葉大学大学院医学研究院和漢診療学

Katsutoshi Terasawa Department of Japanese Oriental Medicine,  
Graduate School of Medicine, Chiba University

「東洋の知」は「西洋の知」とは異なったパラダイムである。東洋の知に立脚した漢方の特徴は「気」の思想に基づく独特の病態認識と、複数の生薬を組み合わせた「漢方方剤」を用いる点にある。独特の病態認識の内容は、気血水論、五臓論、陰陽論であり、心と身体を不可分のものとする診断・治療の体系である。また、「漢方方剤」は多くの場合、複数の生薬を規定の分量で調合したものであるが、20世紀後半に突然に現れた方法論である。

他方、今日、我々が認識している「西洋の知」は19世紀に成立したものであるが、近代自然科学を基盤に据えており普遍性・客観性・論理性を追求する体系である。この目的を遂行するために要素還元論をその研究手法の根幹に据えている。この自然科学はその出発点から、心と身体を二元的に理解し、専ら「物」を取り扱う学の体系である。その理由は「心」は普遍的な尺度で計量出来ないために、普遍性・客観性・論理性を担保できないからである。

この様に本質的に異なった二つのパラダイムをどの様にして和諧させるかが演者のライフワークである。臨床の現場では、この二つのパラダイムを適宜利用することが有用である局面は少なくない。そこで生じる課題は、生氣論に立脚し、しかも多成分系薬剤を用いる「東洋の知」の客観性・普遍性を如何に担保するかである。これによって、漢方がより普遍的な医療技術へと発展すると考えるからである。

そこで、この機会に、生薬の品質評価、漢方方剤の品質評価、病態認識の客観化、薬理学的研究の方法論、および臨床効果の客観的評価の手法など、様々な課題への取り組みを、共同研究者の業績をも紹介しつつ考えてみたい。